

風 狂

第42号

風 狂 の 会

風狂第42号目次

詩

富士の見える老人ホーム	堀口 精一郎
空間の謎	長尾 雅樹
青年	なべくら ますみ
イエスがガリラヤの湖上を歩いた時	原 詩夏至
冬のヒコーキ雲	出雲 筑三
空	高 裕香
詩人の沈黙	高村 昌憲

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十六）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

宮沢賢治山師論	神宮 清志
---------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（八）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年12月号）

(ベネッセ・デイケアに参加して)

お迎えの車が明るい部屋に着くと
ケアスタッフの生き生きとした出迎えと挨拶
テーブルには顔なじみメンバーの懐かしい顔
さて卒寿の老生もたまには心でやるぞとしてみる

黒板にはマシン・歩行体操・Tea time・リアクゼーションなど
いつも同じ言葉だが指導態度が素敵 愛想がいい
周二回は孤独から解放されて若鮎のように泳ぐ
ぼくは南から西へのL字形の庭を歩くのが好きだ

南の庭には春になると芝桜のピンクと白の花で撩乱
初夏の頃は隣の林にいる仲良し子狸の日向ぼっこも可愛い
秋 コスモスの花がいまだに私たちの眼を楽しませてくれる

だが冬晴れの日には西の空に見える雪をかぶった富士山
これは見事だ 老いてなお生きようとするぼく達の
ちょっとした生甲斐であり一幅の繪でもあろうか

(2018年1月1日記す)

遠く近く夢にさすらう
人体の煙の跡が天空から回遊して
空から空へと手を翳しながら
赤い影法師が足萎えている
二段重ねに立脚して
空洞の塔が逆円錐形に浮上する
ブリキの表面がテカテカと反射を繰返す

錯雑に写し取られた星の光が
転回する宇宙塵の彼方から
揺らめきながらトルソーを呼び出している
乳首の赤い胴体の浮遊から
馬の影像が天に向かって躍り上る

雲は扁平にいらかを並べて
沈鬱の階層を滑らせながら
二つの乳房の小鳥を追っている
塔の影が黒く縁取りも彩やかに
大地に風の地図を彫り込み
眩暈する大気は幾万の黄砂を運び
明滅する幽明体の魚の骨を埋める
海星は塔の上で赤銅色に輝き
渚は波紋を遠い水平線にまで連らねて
傾いたコンパスの針先が草の根を刺す

首に旗を掲げたタイト姿の女は
仕切られた地平の夢から飛び出て
何回も空を仰いで空洞の塔を怪しんでいる

浮上する落下傘の花片から
移ろい行く馬首の幻が走り抜け
岬の果てにかぎろう幻影の岩塊
トルソーは夢にさすらう
塔は逆円錐の彫像を大地に錐揉みする

手入れの行き届いたヘアースタイル
ピシりと決まったワイシャツにネクタイ
大きなスーツケースを引きずりながら
電車に乗り込んできた青年
額に汗を滲ませ
バーバリー風の固いコートを手
ネクタイは少し緩めて

ぐるりと見回し あった二つ分の優先席
カバンは隣の席へ置き
取り出した書類に目を通す
膝の前に立つ催促がましい視線には
気がつかない程熱心に

車内放送に気付き
振り向いて外の景色に目をやりながら
あわてた様子で書類を綴じる
立ち上がり連結器のドアガラスに自分の姿を映すと
ネクタイを直し スーツの襟を直し
次は 着込んだコートの襟をなおす

もう一度髪の毛に目をやり
”完璧” という空気で
降りる人たちの後に続く
行先は羽田か 成田か はたまた東京駅か

青年が降りた後
車内には良い匂いが漂っていた
ヘアーローションか
ボディローションか
周囲に無頓着な残り香が

イエスがガリラヤの湖上を歩いた時
足下に水紋が広がったか静かなままだったか
学者たちが頭を悩ますのはその所だ
いま講壇で自ら磔刑に処された者の如く
両腕を水平に拡げ瞑目している博士は
恐らく聖なるものの接近を前に畏れ慎み
微動だにしなかったであろう水の心を
己の裡に呼び覚ましているのであり
学舎の中庭を小鳥のように羽ばたきながら
駆け回っている若き助教は逆に
神の子に直に踏みつけられる湖面の
あたかも幼子のような歓喜の爆発を
その全身で代弁しているのだ
折しも彼らの頭上には各々一匹ずつ
瑠璃色の小蠅が天使の輪を描き
その高速かつ無償の旋回はあたかも
天界の神秘の周縁をただ
永遠に疾走するだけの彼らの召命の
厳粛な戯画でありかつ又
軽妙な聖画であるようだ
詩人よ 君も又かくあり給え
君も又君が命じられた仕方で
両腕を水平に広げて瞑目し
花園を羽ばたき駆け巡り給え
なぜなら君も又彼らと同じく
かつ同じほど聖性の核心から
美しく遠ざけられているのだから
イエスがガリラヤの湖上を歩いた時
学者よ 詩人たちよ
君らはそこにいたか？
せめては今
あたかもペンテコステの聖霊のように
異言を語る君ら一人一人の頭上で
軽やかな祝福の羽音を奏でている
この小さな瑠璃色の昆虫程度にも？

一本のヒコーキ雲が
太陽に向かっている
果てしない空を目指して

落葉した木立の丘を
待っている土色の草のうえを
風をきって描いていく

ヒコーキはもうどこにも見えない
できたてのねこ柳の芽
産毛が密かに揺れている

どの樹木も微塵も動かない
日向ぼっこをする山鳩
ヒコーキ雲はまだ飛んでいる

後方につづく雲は
波のように拡がって
天空に描く一路の道

朝明けの空を見上げては
青い空気を胸一杯に吸い
今日の一があることを知る。

日中の空の太陽は確かに偉大
燦々と陽を浴びては
一日の活動の糧を知る。

時々、空から降る雨の音は色々で
渴ききった心に快く
辛さを流し 潤いを与えてくれる。

夜の空は、ロマンチックな月と星
闇の中にも光があることを知り
なくしてはいけない希望を抱く。

今は亡き詩人が若い頃の私に尋ねた
一週間後に巨大な彗星が飛んで来て
地球に衝突することが確実になって
人類が滅んでも詩を書くかと尋ねた

私は一瞬怯んだのを今でも思い出す
私は一瞬それでも書きますと思った
しかしそれを口に出さず口ごもった
死ねば終わりと考えたのを思い出す

沈黙の後で私は直感的に答えていた
バッハの曲が不朽になるのは死後で
アランの詩も公表されるのは死後で
その様な事など露知らず答えていた

私はとにかく書きますと答えていた
人生には幸福の味があると言うから
一週間の幸福のために書きたいから
直感的に私は書きますと答えていた

予期しなかった様に詩人は沈黙した
沈黙は時間を無限にするに違いない
一週間も永遠も同じ時間に違いない
私も表現する逆説を信じて沈黙した



三浦 逸雄 「庭にあったミズナラとオンコ」 10号（麻布・油彩）

最近のこと、花巻出身の若いひとと知り合いになり、いい機会なので宮沢賢治のことを訊いてみた。すると地元ではあまり評判がよくないようなことを言って、多くを話したがない。地元で評判が悪いというのは興味深いことだ。「カネに汚い」というようなことを、ちらと漏らした。これはいよいよ聞き捨てならないと思った。芸術家がカネに執着するのは、よくあることだ。芸術家でなくともあるし、皆そうだとも言える。カネのことが出てくると、多くの人は嫌うけれど、より人間的になっていい。親しみが湧いてくる。

同じ岩手県出身の石川啄木にも、カネにまつわる芳しからざる話が伝わっている。金田一京助は啄木が無心に来ると、いやな顔をせずいつでも応じた。ところが金田一夫人が、啄木が来ると必ずカネをせびるので、蛇蝎のごとく憎んだという話を聞いたことがある。さもありませんと思える話である。カネとその人の関係を明らかにすることによって、はじめてその実態が見えてくる。このようなことがあっても、啄木の文学に傷がつくようなことはいつさいないことはない。ばかりでなく文学に厚みが増してくる。宮沢賢治もそうした厚みを感じ取りたいものだ。

次に逢ったときまた訊いてみると、おおよそ次のような話を聴くことが出来た。賢治はその実家が大金持ちで、金貸しと大地主だった。金貸しというのは土地を抵当にして金を貸すので、自然と土地持ちになってしまうというのが、戦前までは常態だった。大地主とされる人は、おおかた質屋である。あるいは質屋が出発点になっている。よって多くの恨みを買っていることになり、賢治はその一族として風当たりの強さもあっただろう。そのことを賢治が強く感じていたということは事実らしい。この辺の事情には太宰治にも似たような境遇がある。こうしたお大尽と言われる家の息子なら、カネを出す場面では有無を言わず支払わなければならない。太宰治はその辺の気の使いようは並大抵ではなかったようだ。しかし宮沢賢治においては、それほど素早い行動が出来なかったかもしれない。すると普通にカネを使っても「カネに汚い」と言われてしまう。そんな状況が想像される場所である。

賢治は科学者、農業技術者、宗教家、といろいろな顔をもっている。鉱物研究者でもある。賢治が若い頃、早池峰山の近辺を歩き回ったことがある。そのとき山の案内人を勤めた人の情報として、賢治は鉱物資源を埋蔵した山を見つけて、一儲けしたいと熱心に目論んでいたというのだ。この話は地元の人でなければ知りえない情報であろう。「山師」という言葉には二つの意味がある。山に入って調査研究する人、大儲けを企む人、と二つある。山師といった場合、後者を指すことが多い。賢治が地元で山師といわれるのはその両方の意味である。この話はどこまで信用できるか、これは大いに疑問であろう。山を歩いて本気でそう思っても不思議はない。それをその通りに言っても自然なことだ。いっぽう山の案内人に一つのリップサービスとして、そんな話をしたのかもしれない。これもありそうな気がする。これが普通の人ならそれほどのこともなかつただろうが、あの宮沢家の賢治が、となると地元では大いに話題になったであろう。それもよからぬ評判の元になるのが世の常というものだ。

わたしが聞きだし得たのは、わずかにそれだけのことだった。不評判の元はもっとほかにもあるはずで、これはほんの一部に過ぎないらしかつた。賢治は地元で評判がよろしくないといっても、それはごく内緒の話である。おおかたは「先生」と呼ばれ、郷土の誉れとなっているのは

いうまでもないことだ。むしろ神格化されている趣さえある。花巻には宮沢賢治の研究者と称する一群の人々が居る。この人たちは「宮沢賢治山師論」を極度に嫌う。タブー視されている。知られることを恐れている。こんなマイナスイメージは抹殺したいのである。しかしよくあることながら、鼯鼠の引き倒しになりそうな気もする。

優れた芸術家がしばしばこうした傾向をもっている。そのことをしっかりと見つめることによって、本当の宮沢賢治論が出来上がるはずだと思う。勝手に欠点を覆い隠していいというものではない。むしろ芸術家なれば、思いもよらない「悪」をもっていることだってある。身についた「悪」を発見し、それを十分に研究してはじめて、ひとつの人間論になる。

宮沢賢治が「カネに汚い」「山師」という話を聞いて、この稀有な作家をじっくり読み直してみたくなった。これでようやく賢治の実像の一端が見えてきたように感じた。カネとセックス、芸術家にはいつもこの問題がひそんでいる。人間として不可欠のことなのだから、ここを避けては何も分からないのではないかといいたい。石川啄木には『ローマ字日記』という作品があって、赤裸々に己のセックスを告白している。宮沢賢治にはいまのところ、そのような影さえも見えない。

「雨ニモマケズ」の詩に代表される人間的な良質さばかりが喧伝されるということは、感心したことではない。教育的な意味があることは認める。しかしそれがすべてのように思い込ませることは、真実から遠ざかってしまうことになりはしないか。

「サウイフモノニ

ワタシハナリタイ」

と書いているということは、そういう人から自分がいかに遠いかを意識していたと認識すべきだと思う。しかし多くはそう受け取らないようだ。賢治がそういう人であったかのごとくに勝手にイメージを作ってしまう。この詩は発表されたものではなく、手帳に書いたメモであったことも、その意味を裏付けていると見られなくもない。さらにその手帳ではこの詩の最後の部分と見開きでお経の言葉が書かれていた。「南無妙法蓮華経」という言葉を中心に「法華経」の言葉が並んでいた。ということはあるいはこの詩は信仰の心得として心に刻んだものである可能性もある。ひとつの「祈り」として「雨ニモマケズ」を詠んだとして、読み直してみるとピンとくるものがある。

「雨ニモマケズ」の詩碑は全国に一〇〇基くらいあるらしい。生前まったく無名だった宮沢賢治が、偉人のイメージとともに国民的詩人として定着していったのは、賢治にとって不本意なことだったかもしれない。戦時において「欲しがりません勝つまでは」のスローガンと相呼応して、「雨ニモマケズ」が有名になっていった。それも政治的意図をもって大政翼賛会がひろめたものだった。さらに戦後においては、窮乏に耐えて生きる人々に励ましの意味で広められた。戦争には負けても雨ニモマケズという言葉で耐え忍ぶようにという意図とともに。この詩のなかの「一日ニ玄米四合ト」というところを「玄米三合」と変えて教科書に載った。これはGHQの指示によったと言われている。このように捏造された宮沢賢治のイメージと、実態の賢治には距離があるということは、その後の研究においてしだいに明らかになりつつある。

偉人というイメージとともに登場した詩人にして童話作家に「山師」のイメージはあまりに突飛すぎる。奇観を挺してさえいる。それでもわたしたちは地元で「山師」という評判があり、カネに汚いという謂れがあることを知っておいていい。それも地元の支持者たちが世間に知られる

ことを極端に恐れ、嫌っていることも知っておきたい。このようにしてはじめてこの解きがたい謎の多い作家の現実性が見えてくるかもしれない。そのことに期待したいのである。(完)

第六章

私の密かな方法とは、ジャンナンも私も所属していたT大尉に対する私の術策に由来します。この術策は友情と呼べるものではありません。しかしながら、そこに私は楽しい時間を見出しました。この大尉は陸軍士官学校生で、大戦前には砲兵隊で少し過ごした平凡な砲兵でしたが、命令する術を知っていました。学校の恐ろしい新入生いじめを私に語りながら彼は言いました、「その様にして人は冷酷になる様だ」。彼は才気に溢れた芸術家で、絵画やデッサンや本や会話を愛していました。彼の最大の楽しみは、夜にコニャックを飲んだり煙草を吸ったりするために私を招待することでした。私たちはその時には汚い学生部屋にいたかの様でした。彼は美学に関する全ての常識を知っていました。しかし、それで満足していませんでした。いずれにせよ私は、彼に衝撃を与えるためにそこにいたのです。例えば私たちにはダ・ヴィンチやミケランジェロやラファエルの絵葉書がありましたが、それらは私の処に送られて来たものです。彼は感激して私を当惑させましたが、この方法によって彼は私に様々なことに注意する様にさせました。私がそこまで真剣に考えていたのは音楽だけでした。これらの隠された対談において、私は『芸術論集』の主要な主題を試みました。私がいないと彼は退屈していました。ところで私は時々命令の敏感な点で彼を刺激しました。例えば彼が尋ねます、「あなたの部下たちは電話番号をしていない時、何をしていますのですか」。私は答えます、「彼らは、あなたが日中やっていることをやっています」。その時、彼は私を決して容赦しませんでした。そして実際は彼に道理があるのです。しかし、私は彼を退屈で苦しめた儘にして置きました。彼は戻りました。その瞬間に私は彼を導くことが出来たのであり、全てが可能だったこの人物を少しは穏やかにすることが出来たのです。

戦争を知らない人々は、単なる大尉は東洋の独裁者と同様の権力を握っているに違いないと間違っ理解しています。一連の全く単純な命令を一つの例として理解されるでしょう。砲台の後にベルナルという名の若い肉屋がいましたが、彼はベッドやテーブルがある今でも、人が住んでいる村で自分の仕事を行いました。彼の仕事は、牛を細かく切ることであり、最上の部位を薄い布で包むことでした。大尉や中尉や曹長という権力者の命令で運命づけられていました。彼は幸せでした。勿論、彼は善良な人間でしたが、結婚には一度失敗していました。そこから大尉の気に入らず、全く簡単に命令しました。「砲手ベルナルは明日リュックサックを担いで出発し、ジュリーの森の監視所へ赴くこと。一人の案内人が六時にメッツの道で待機しているものである」。これは罰ではありませんでした。これは配置換えでした。この様にして偶然に私は、一斉砲撃に怖れて飛び上がり、男たちや女たちや神々を呪っているベルナルの様な人が到着するのを見ていました。このベルナルが我々の勇敢な人々の一人になったのです。そして運命は彼にかなりの負担を掛けました。彼はヴェルダンに到着しました。負傷者との交替でした。この負傷者は再度の爆発で殺されましたが、彼は腕に抱えて運び出しました。彼自身は逃れました。彼は気分を明るくする兵隊でした。その例として二つのことを示します。一つ目は、単純な或る大尉が、最も単純なやり方で絶対的な権力を行使することです。二つ目は、最初の怖れに従って人間を決して判断してはならないことであり、如何なる怖れに従っても判断してはならないことです。何故なら、最も勇敢な人たちも何度でも怖いと感じるからです。

この恐怖の問題は、私をジャンナンに立ち戻らせます。彼は臆病ではありませんでした。しかし或る日、私は彼が不安にしているのを見ました。彼はポーモンの私たちの楽園にいたのですが、その日は我が軍の勢力が後退させられて動揺していました。雪崩が始まった時、私は『組まれた両手の骨格』という表題の小説を覚悟して干し草の上で読むのを決めていました。私は不機嫌でしたが、理由は分かりません。そして私はそこに執着しました。ジャンナンも又、移動するのは不可能と見て止まりました。しかしながら彼は飛び降りて、敵の到達を計算しました。私は小説を読もうと思って頁を捲りましたが、一言も理解出来ませんでした。我が軍が全域を取り戻したのには感嘆させられました。人がいる処に止まることは一種の慎重さでもあることに、私は一度ならず認識しました。Wは逃げ出したいと思いつつも、ヴェルダンで殺されました。何処へ逃げ出すのでしょうか。私は決して逃げ出す術を知りませんでした。それに反して、私は脱することが重要である時、すっかりその情熱がありませんでした。そして恥辱的な時を思い出して、私は自分に言いました、「最も急を要する命令でも私は今は実行しないだろう」。実を言うところの時に命令は出ていませんでしたし、行うべきことは何もありませんでした。この時の恐怖は、病気の様なものです。

如何にして私が相手のジャンナンの反抗的で非常に異なった人生を救済するのに貢献したのかを言うことが未だ残っていますが、彼は今でも生きていますし、大事な友人です。その彼は美德もかなり持っていました。彼は隣人の負担が重い時に、その負担を無くす様に命じるキリスト教の教えが実践される処を、私は一度ならず見ました。徳の高いそれらの文章は私には興味がありませんが、その行為の美德には興味があります。それ故に野営地ではとっくに私は一九一四年組のこの少年と仲良くなりましたし、何の疲れも恐れもありませんでした。彼は私たちの志願兵の小さな班から出されて、T大尉の砲兵中隊へ降りて行きましたが、より一層辛い仕事で泥だらけになり、服は穴が開き、今まで以上に罵られました。彼もブルターニュ地方のブリトン人でしたが、闘牛の様になって時々は一癖あり、気になりました。その頃は色々なものを読んでいて既に良きカトリック教徒で、進んで理論家になり、駄弁家でした。少なくとも彼は活動的でした。そして腹痛で医者に雇いながら仮病を使っていました。その時の彼はどんなことでも放棄しました。「あなたは私を育てる…」と彼は言います（極めて不適切です）。そして、激しい動作と一緒に、それは脅しと見做すことも出来ました。というのも彼は縁なし帽子を地面から投げ出したからです。それは分隊に身を委ねたことでもありました。T大尉が極めて真剣に、私がCのことを知っていたかどうかを尋ねた時、私は何も知りませんでした。根気強くて怖れを知らない砲手を称賛するために行く、如何なる努力も私にはありませんでした。その時、大尉は医者からの診断書を私に読み上げました。もしもCがこの診断書を背中にぴったりと付けて後方へ送られたなら、彼が消え失せたことを私は直ぐに分かりました。真面目さを粉碎しなければなりません。たし、私も上手にやりました。診断書には誇張がありました。そして私が知った様に大尉も、可笑しいと判断する様に軍医に勧められます。私は歓声がCから離れたことが極めて不適切であることを強調しました。何故なら、それは寧ろCに言う様になることと反対であったからです。そして、Cが縁なし帽子を地面から投げ出したことは軍隊の衣類を進んで破損するものであり、大きな間違いである等々と私は結論付けました。私は、私が出来ることを行いましたが、その判断を下す人には笑われました。そして、先ず極端に厳しいことに仕向けられたことも私は言わなければなりません。少なくとも走って仕事を行わなければならないだけでした。司令官（少佐）は

温和な人物でした。でも、その人間関係は破られました。大尉はCに関心があり、そして監視所へ送りました。もしもそれが罰であったなら、既に戦争に長けた人間にとっては、まんざらではないかも知れませんでした。監視手であり信号兵であったCは、ジャンナンよりも覚えは余り早くありませんでしたが、彼以上に多く覚えて、モールス式電信符号や無線電信を覚えるまでになり、それは優れたものでした。彼はそのことをそんなにも期待していませんでした。そして後になって、彼がその上で哲学的問題について考えていたことを私は理解しました。彼は言いました、「それは奇妙である。私は進路をすり減らした時の少年時代にそれを理解した。それは奇妙である。私が砲兵中隊にいた時、私は命じられたことは全て上手く行った。でも、私には幾つもの罵詈雑言しかなかった。しかし、「あなたは私を育てる…」と軍医に言った日から全てが変わった。大尉は私に関心があった。私は無線電信を覚えた。そして、私はここで気に入られているし、もしくはほぼ気に入られている」。これは、それこそ私がうっかりとは失いたくない『ザディーグ』や『カンディード』(1)の一部の様なものです。(完)

(1) 『ザディーグ』(一七四八)や『カンディード』(一七五九)は、いずれもヴォルテール(一六九四～一七七八)の小説である。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつばら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

堀口精一郎（ほりぐち せいいちろう）

一九二七年三月、東京生まれ。青春前期は皇国少年として熱血の血をたぎらせた、いわば戦中派のはしぐれ。戦後は文芸特に短歌に親しむ。一九八九年仲間と共に詩誌「さやえんどう」創刊、詩を書き始める。

詩集『マンモスの轍』（土曜美術社出版販売・一九九四年五月）、『神の魚』（横浜詩人会・二〇〇〇年十月）などを刊行。

二〇一四年七月、二五年間編集発行人を続けてきた詩誌「さやえんどう」を終刊。

同じく二五年間実績を残してきた月二回の研究会も解散。身軽になった。

現在は、日本詩人クラブ、横浜詩人会、風狂の会に所属するのみ。今後は楽しく生きてゆきたいと思っている。なお未刊の詩篇が多数残っているので最後の詩集を出したい。

三浦 逸雄（みうら いたお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（第41号）

風狂の会 川柳忘年会報告：風狂人のみなさまの川柳を楽しく拝読いたしました。

アラン『大戦の思い出』（七）第五章：どんな戦争でも、見識のない長たちによって行われる。誰も戦争人間であるが、恐怖よりも自負が多く闘っているのですね。優しくなく厳しかった大尉でなく、戦い方を良く知っていた非識字者の彼が、戦争の危機を脱して復員して、平和になってからある時自殺した話には哀しくなりました。「あんたは年寄りに見えるが上等兵と同じではない。階級を下げられた植民地兵の曹長に見えるよ」という言葉がアランのひとを表していると思いました。

謝罪は美德か悪徳か：日馬富士の暴行問題について、日本的に美德と思っていたことが、国際的には悪徳だということを知りました。弁護士で画家で大学院生のひとが、一生を棒に振ったと思うと、なぜ抑えられなかったかと残念でたまりませんでした。モンゴルと日本の、ほんとうの意味での架け橋になって欲しいと願う心に共感しました。

三浦逸雄の世界（二十五）：「郊外の午後」愛犬とたわむれる、やすらぎのひとときが流れているようです。

太陽：夕陽が、ゆっくり沈んでいく美しい光景が見えるようで、感動が伝わってきました。

歴史探訪：秋の山の辺の道での自分探しの旅、よかったですよね。

アデュー宣言：詩の朗読会は一度だけ行ったことがあります。静かな朗読会でしたが、色々な朗読会があるんですね。

こま狗の空：きっと唇を噤んだ吽の終連に共感しました。

閑居の弁：2編の詩について、歴史を知り詩が良く理解できました。「つぶやき」の終連に共感しました。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第42号

2018年1月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/119078>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119078>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト